

三浦一族史跡マップ



「三浦大介義明像」
満昌寺
(横須賀市)

三浦半島に 三浦一族を 訪ねる



「阿弥陀三尊像」浄楽寺(横須賀市)

三浦一族ゆかりのイベント

三浦一党出陣武者行列

衣笠を根城に鎌倉幕府創建に大きな役割を果たした三浦氏を偲び、衣笠さくら祭の際に隔年で行われています。

鎧甲冑に身を包んだ武者達が、衣笠駅前通りを練り歩く様子は勇壮で見応えがあります。

【実施】隔年4月下旬 **Map H-8**

【場所】JR衣笠駅前通り

【問合せ先】衣笠観光協会

(電話 046-853-1611)

道寸祭り～笠懸(かさがけ)



平安時代から戦国時代に至るまで、約450年に及び三浦半島中心に栄華と盛衰の歴史を繰り広げてきた三浦一族は、1516年に新井城で北条早雲に攻められ、滅亡します。

三浦一族終焉の地となった油壺での3年にも及ぶ壮絶な攻防戦と悲話は、現在も多くの人の心を打ちます。「道寸祭り～笠懸」は往時の武者たちの勇姿を偲ぶことができます。

【実施】5月最終日曜日 【場所】油壺荒井浜海岸 **Map E-13**

【問合せ先】三浦市観光協会 (電話 046-888-0588)

【観光ボランティアガイド】

横須賀 NPO法人よこすかシティガイド協会
電話 046-822-8256 URL <http://yokosuka.kankoh-guide.com/>

鎌倉 NPO法人鎌倉ガイド協会
電話 0467-24-6548 URL <https://www.kcn-net.org/guide/>

三浦 みうらガイド協会
電話 046-888-0588 URL <https://miuraguide.jimdofree.com/>

【原案・監修】鈴木かほる(三浦一族研究会特別研究員)

【協力】三浦一族研究会・NPO法人よこすかシティガイド協会・みうらガイド協会・横須賀市・鎌倉市・逗子市・三浦市・葉山町・(一社)横須賀市観光協会・(公社)鎌倉市観光協会・逗子市観光協会・(一社)三浦市観光協会・葉山町観光協会

なお、記載内容には、伝承等や異説のある事項を含んでおります。

【編集・発行・問合せ先】

神奈川県横須賀三浦地域県政総合センター商工観光課

〒238-0006 横須賀市日の出町 2-9-19

神奈川県横須賀合同庁舎

電話 046-823-0433

【制作・印刷】株式会社アド・マインド

(2022年(令和4年)9月発行)

三浦一族とは

平安末期、武士の台頭により、東国に多くの氏族が誕生します。その一つ、源家累代の家人となる「三浦一族」は、いつ衣笠城を本城としたのか不詳ですが、『吾妻鏡』では、三浦義村は、義祖為継が後三年の役※で源義家に従って以降、その恩禄を賜る累代の家人であると語っており、この為継は『奥州後三年記』に三浦氏として初めて登場します。この為継の子義継以降、義明、義澄、義村と源義家の「義」を通字とし、源氏との絆を深めていきます。※後三年の役(1083~1087)は、源義家が奥羽の清原家衡らを平定した合戦です。

【鎌倉幕府成立のころ】

衣笠城合戦

1180年、源頼朝が伊豆で挙兵します。

三浦一族は、頼朝勢に合流しようと衣笠城を出陣しましたが、暴風雨により出陣が遅れ石橋山合戦に間に合わず、頼朝の敗走を知り、衣笠城に引き返すこととなります。

このとき平家方が攻めたのが衣笠城合戦です。『吾妻鏡』によれば、戦況に利あらずとみた三浦一族の惣領、三浦大介義明(年齢89)は、「老命を頼朝に投げうち、子孫の勲功に募らんと欲す」と諭し、義澄らを闇夜に乗じて城から脱出させ、自らは翌早朝に河越重頼らに討たれました。

義明は、自らが頼朝の捨石となる代わりに、源氏再興の晩には子孫が要職に就くことを暗に頼朝に願ったのです。

衣笠城を脱出した義澄らは、怒田城(現在の久里浜あたり)から安房(千葉県)へ向けて船を出し頼朝と合流します。この1か月後、頼朝は大軍を率い鎌倉入りを果たし、義明の願い通り三浦一族を重臣として重用していきます。



衣笠城址古図(満昌寺)



衣笠城址の碑



三浦大介義明廟所
(満昌寺)

【登場人物その言】

三浦大介義明

みうらおすけ よしあき

(1092~1180)

為通から数えて4代当主。源頼朝挙兵時の三浦一族の棟梁。自らの命と引替えに、一族の隆盛の礎となった人物です。満昌寺にほぼ等身大の木造があり、老将の風格を伝えています。(表紙写真)

いちのたに ひよどり

一谷合戦と鶴越えの逆落とし

『平家物語』がとりわけ目覚ましい活躍として書き立てているのが、佐原義連の一谷における鶴越えの逆落としです。

平氏が一谷城(現在の神戸市)に布陣していたとき、なかなか勝敗がつかず一進一退を繰り返す中、城北の搦手に廻った源義経は、軍勢に驚いて次々と一谷の搦手へ落ちていく大鹿たちをみて馬を断崖から落としてみると、足を打ち折って転び落ちる馬もありましたが、うまく駆け下りる馬もありました。「心得て行けば損じることはない」との義経の掛け声に皆次々と駆け下ったのですが、ここぞという所で、苔むした大磐石の釣瓶落としの絶壁となり、さすがの義経もたじろいだそのとき、佐原義連が進み出て、「この

ような所は我らの本拠三浦では、鳥ひとつ射るにも朝夕、馳せ廻っている馬場である」と言って真っ先に駆け下り、これにつられて、皆、えい、えいと声をあげ、一気に一谷城の背後になだれ込みました。不意を

突かれた平氏はあわてふためき、先を争って須磨浦に助け船を求めたと伝えられています。

この話が事実なら、義経の策である逆落としの奇襲を成功へと導いたのは佐原義連ということになります。他の人物だったという説もあるのですが、いずれにしても義連は『平家物語』の中に鶴越えを先駆けた騎馬の鍛錬者として紹介され、後世に名を残した武将なのです。



【登場人物その式】

佐原義連 さわらよしつら(生没年不詳)

義明の末子。一族の中でも、三浦宗家(本家)に次ぐ地位にあったといわれます。その城は横須賀市佐原にあり、「佐原十郎義連城跡」の碑が残っています。義連は、源頼朝が三浦を訪れた際、馬上で会釈した上総介広常を諫めたり、三浦義明の弟岡崎義実が頼朝から水干(当時の衣類)を賜った際、その美服は自分が拝領すべきとして口論に及んだ広常を諫めました。しきたり等に詳しく、八幡宮で静御前が舞う舞台を即興で設けるなど、多彩な才能を披露し、頼朝の信任を得た人物でした。

【ゆかりの場所 その壱】

まんしょうじ **Map I-9**

満昌寺

源頼朝が源氏再興の捨石となった三浦大介義明を弔うため建立したと伝えられています。頼朝は義明の十七回忌に列席し、義明の霊に「身は果てても今日まで共に生きて」と語ったとされること



とから、義明の享年89に17を加えた106歳という数え歌が「鶴は千年、亀は万年、三浦の大介百六つ」という祝い詞となり、広く流布しました。

本堂裏の御霊社は和田義盛の建立といわれ、義明を神格化した衣冠束帯の鎌倉期作の坐像(国指定重要文化財)が祀られています。

【拝観】要予約(拝観料300円、小学生以下無料)

【問合せ先】電話 046-836-2317 横須賀市大矢部 1-5-10

【行き方】京急北久里浜駅から「大矢部・新岩戸団地循環」バス停「大矢部3丁目」下車徒歩10分

【鎌倉幕府で大活躍】

【登場人物その参】

三浦義澄 みうらよしずみ(1127~1200)

義明の次男で嫡子。父義明の死により、家督を継ぎます。衣笠城合戦の後、頼朝と合流して、やがて鎌倉に入ります。頼朝が、後白河院から上洛を促され、福原(現在の神戸市)の平清盛を攻めようとした際に、まず東国固めが肝要と献言。これにより頼朝は鎌倉に留まり、西国へは弟の義経や範頼を派遣しました。1190年の頼朝の上洛には武家の筆頭格として供奉しています。

三浦義澄の名譽

1192年7月、源頼朝の征夷大將軍への任命の文書(除書)を、勅使から受け取る役を命ぜられた三浦介義澄は、鶴岡八幡宮若宮にて、御家人らの羨望を集める中、膝行して文書を受け取り、これを乱箱に入れ、腰をかがめ恭しく頼朝に奉りました。このときの様子を『吾妻鏡』は「千万人の中に、義澄、この役に応じ面目絶妙なり」と記しています。これにより義澄は、幕府の御家人筆頭の地位を諸国に広く知らしめたのです。

義澄が選ばれたのは頼朝挙兵の捨石となった父義明の功績に報いられたということもありますが、義澄は「8か国に聞こえたりし弓矢とり」であり、沈着冷静な人物であったと思われる、大役に相応しい風格が備わっていたとも考えられます。

三浦一族の全盛期

義澄の跡を継いだ義村は、相模、河内、紀伊、土佐の守護や御殿別当、評定衆を歴任し、娘(矢部禅尼)を執権北条義時の嫡子泰時に嫁がせ外戚となり、執権義時の亡き後は幕府を左右する政治力を持つ存在となりました。

この頃、三浦一族の国司・守護や地頭職にあった地域は、北は陸奥国(青森県、宮城県、福島県、岩手県)から南は肥前国(佐賀県、長崎県)、大隅国(鹿児島県東部)、筑前・筑後国(福岡県)と、全国に及び、その勢力の大きさが窺えます。

しかし義村は、一族の中で大きな勢力を持っていた従兄弟の和田義盛と和田合戦で敵対し、和田一族は滅亡します。

【登場人物その四】

三浦義村 みうらよしむら(生年不詳~1239)

三浦一族全盛期の当主。執権や公卿の姻戚となり、特に娘婿中納言二条俊親を都とのパイプ役に使うなど、三浦氏を北条氏と並ぶ家格に押し上げました。また、承久の乱後は、戦後処理のため都に留まったことをみても、政治的能力が備わっていた人物と思われる。一方、謀略の者と評されることもあり。義村の墓は、三浦海岸の金田湾近く、丘の上の福寿寺の塔頭(子院)だった南向院跡に五輪塔が残っています。

【ゆかりの場所 その弐】

まんがんじ **Map I-10**

満願寺



木造観音菩薩立像(満願寺)

佐原義連開基とされ、鎌倉初期創建と考えられます。境内から出土した古瓦に、源頼朝が建立した鎌倉永福寺や鶴岡八幡宮から出土したものと同類のものが含まれることから、三浦義明を追善するために頼朝が発願した供養堂ではないかという説もあります。

国指定重要文化財の観音菩薩立像と地藏菩薩像は、2mを超える像高、玉眼を用いた意志的な面相、量感に富む堂々たる体軀

が見る者を圧倒します。観音菩薩立像と浄楽寺阿弥陀三尊像の両脇侍との共通性から、運慶または運慶工房のものと考えられます。

後に、義連の子家連が、梵宇(寺)供養のため京都泉涌寺(皇室ゆかりの寺)の開山後仍を三浦の館に招いています。都から高僧を招くことができたその財力が偲ばれるエピソードです。

【拝観】要予約(拝観料300円)

【問合せ先】電話 046-848-3138 横須賀市岩戸 1-4-9

【行き方】京急北久里浜駅から「大矢部・新岩戸団地循環」または「YRP野比駅行き」バス停「岩戸」下車徒歩5分

和田合戦

1213年、鎌倉幕府で勢力を誇った和田義盛の一族が滅亡した戦です。將軍実朝と執権義時を廃し、故將軍頼家の遺子栄実の擁立にかかる企て(泉親平の乱)に関わり失敗した甥の胤長が首謀者として配流され(後に処刑)、さらには一族に給わるはずの胤長の屋敷まで没収されました。義盛は、「屈辱を受けた」とする若衆に押される形で北条氏に向けて蜂起しました。

しかし義村は義盛に味方するという起請文を書きながら変心し、義時に義盛の挙兵を伝えます。これにより謀反人とされた義盛らは滅亡しました。



和田塚 (鎌倉市)

【登場人物その五】

和田義盛 わだよしもり (1147~1213)

三浦大介義明の長子杉本太郎義宗の子。庶流ではあるが、御家人を統率する初代の特別当(後の侍所別当)となりました。都では、和田義盛が三浦一族の長とみられていました。奥州征伐にも加わっており、浄楽寺の阿弥陀三尊像の造立は、その成功を祈願したものとも、北条時政の伊豆願成就院の建立に対抗したものともいわれています。なお、孫の朝盛は、和歌を通じて三代將軍実朝に近く侍った学問所番でした。

実朝関連情報

神奈川県立大船フラワーセンターには、源実朝の『金槐和歌集』に詠まれた樹木が多くあり、ゆかりの和歌とともに紹介されています。



【ゆかりの場所 その参】

浄楽寺

浄楽寺の開創は明らかではありませんが、1189年に和田義盛が夫人小野氏と共に発願し、運慶により造像された仏像5体がその起源とされます。全国に18体あるとされる運慶真作に含まれ、いずれも国の重要文化財に指定されています。また全国でも運慶作の阿弥陀三尊像が揃っている作例は唯一といえます。いずれも檜の寄木造りで、阿弥陀三尊には神秘的かつ格式の高さを表現した彫眼を用い、毘沙門天・不動明王には写実的で力強い玉眼が用いられています。この彫眼と玉眼の使い分けには運慶の信仰を感じ取ることができます。和田義盛は仏教に篤く、三浦半島に多くの寺院を建立し、数々の造像を行ったとされますが、現在では浄楽寺だけが、開創当時の運慶作の仏像を安置しています。

【拝観】 要予約 (拝観料 500円、一般公開 200円)
一般公開 毎年3月3日、10月19日
※浄楽寺 WEB 予約フォームより予約

【問合せ先】 電話 046-856-8622 横須賀市芦名 2-30-5

【行き方】 JR 逗子駅から「大楠芦名口行き」または「横須賀市民病院行き」他バス停「浄楽寺」下車すぐ (バスの所要時間約 30分) 雨天時は文化財保護のため、拝観をお断りする場合があります。

【登場人物その七】

矢部禅尼 やべのぜんに (1187年頃~没年不詳)

三浦氏全盛時代に義村の娘として生まれ、北条泰時の妻となります。おそらく泰村の姉であろう。北条時氏を生み、執権の嫡母となる三浦一族トップの女性です。のちに、三浦氏庶流の佐

【戦国期 三浦一族の血で油壺は…】

新井城合戦

三浦氏宗家が宝治合戦で滅んだ後、「三浦介」は、義明の末子である佐原義連の孫盛時の家系が受け継いでいきます。

戦国期には、その末裔三浦義同(道寸)が、相模国中郡(現在の平塚市辺り)と三浦郡のほぼ全域を掌握していたとみられています。

1512年8月、相模国への進出を目指す伊豆の伊勢宗瑞(後の北条早雲)に岡崎城(現在の平塚市)で敗れた道寸は、逗子住吉城を弟に委ね、自らは三浦郡秋谷・長坂・林へと南下し、多くの兵を失って最後の詰城新井城に立て籠もることになります。一方、早雲は同年10月には、三浦氏を滅ぼすための向い城として、三浦半島入口に玉縄要害(鎌倉市)を構えました。新井城は、「巖険阻にして、獣も駆け登り難し」と称された天然の島城で、容易に落とせる城ではなく、早雲も兵糧攻めの長期戦を覚悟したといえます。

義同らは、丸3年の籠城を続けますが、『北条五代記』には、戦記物ゆえの誇張もあるでしょうが、義同・義意父子の最期



三浦義同供養塔 (三浦市)

【ゆかりの場所 その四】

清雲寺



滝見観音像 (清雲寺)

清雲寺の縁起では、第3代衣笠城主三浦義継が父為継(1108年没)の供養のために建立し、父に似せた毘沙門天像(県指定重要文化財)を彫らせ本尊としたといわれています。しかし、その技法から鎌倉後期、運慶の系統を引く仏師による作ともいわれています。現在の本尊「滝見観音」は、もともと近くの円通寺(廃寺)の本尊でしたが、江戸後期にこの寺に遷されました。縁起では滝見観音は為継の父為通(1083年没)が請来したといいますが、その造立は南宋時代(1127~1279)で年代が合わないため、承久の乱後、宗像社領(福岡県)の預所となった三浦泰村が大津貿易の中で請来したと考えられています。滝見観音は、膝を立てた半跏像(遊戯像)で、中国産の堅い桜桃の寄木造りです。目にはガラス様の玉をはめ込み、毛髪、璣珞などは中国独特の練物です。本堂裏には近くの円通寺(廃寺)のやぐらから移された三浦為通・為継・義継の3代の墓と伝わる五輪塔があります。

【拝観】 拝観要予約 (志納金)

【問合せ先】 電話 046-836-0216 横須賀市大矢部 5-9-20

【行き方】 京急北久里浜駅から「大矢部・新岩戸団地循環」バス停「大矢部3丁目」下車徒歩6分

【三浦氏宗家 滅ぶ】

【登場人物その六】

三浦泰村 みうら やすむら (1184~1247)

義明の曾孫にあたる。父義村から相模・河内・土佐の守護を継承し、さらに、若狭守を歴任し、幕府の重大案件を都に伝える東使役を務めました。また、筑前国宗像大社領・筑後国神崎庄を預かり、宋との貿易権を獲得し大きな力を持ちます。陰りが見え始めたのは父義村が急死し、北条氏から娶った2人の妻と、烏帽子親で執権の泰時が相次いで没した頃です。さらに最大の理解者・前將軍頼朝が帰洛させられました。

宝治合戦

関白九条道家は、三浦義村の奏上により、2歳の時に鎌倉殿として下向した子頼朝を養育した三浦氏を執権にしようとして画策しましたが、これが露頭して道家は失脚し、三浦氏は後ろ盾を失いました。三浦氏を疎ましく思っていた執権北条氏の外戚安達氏は、三浦氏滅亡に追い込む千載一遇の好機とみて、戦いを仕掛けました。1247年6月、自邸に火をかけられた泰村は、頼朝の廟所(法華堂)に籠り、一族五百余名と共に自害します。自らの顔を刀で削り悔しさをあらわにした光村とは対照的に、兄泰村はその血で頼朝の御影を汚してはならない、とたしなめたと伝えられています。

この宝治合戦により、三浦氏宗家は滅びますが、庶流の佐原義連の子らが、北条方について生き残り、五男の盛時が「三浦介」を継承します。その後、三浦氏は新井城を築き戦国時代へと続いていきます。



伝 三浦氏やぐら (鎌倉市)

原盛連に再嫁し、光盛・盛時・時連を生みます。宝治合戦では、北条氏との旧好を重んじ、子らを幕府に付かせて生き残り、その子盛時が「三浦介」を継承していくこととなります。三浦郡矢部郷に居住する矢部禅尼に亡夫の遺領安堵状を届けた北条時頼は孫であり、のちに5代執権となる人物です。彼女は横須賀市の名のもととなった横須賀氏・美作国の高田城主や会津の守護輩名氏、秋田角館城主などに三浦の血統を伝えています。

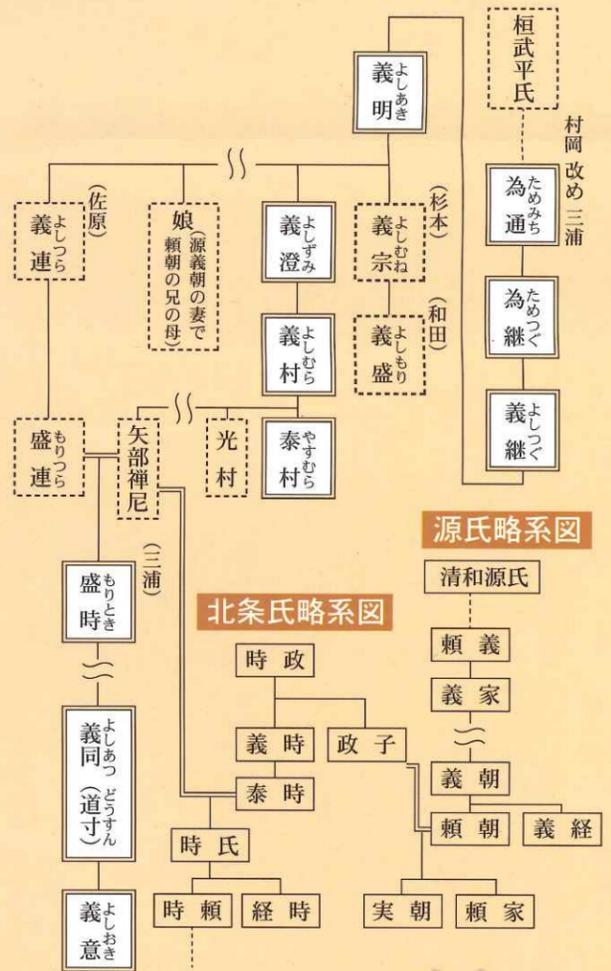
三浦一族関連略年表

- 永保3年(1083) 後三年の役。衣笠城主・三浦為継が、後三年の役で源義家に従って以来、その恩禄を賜り、源氏累代の家臣となる。
- 平治元年(1159) 三浦義澄、平治の乱に源義朝に従い参戦
- 治承4年(1180) 【頼朝挙兵の年】
 - 6/27 義澄、伊豆に立ち寄り頼朝と挙兵の相談
 - 8/17 頼朝、伊豆で挙兵
 - 8/23 頼朝、石橋山合戦に敗れ安房に向け敗走。三浦一族は戦に間に合わず引き返す。
- 8/26 衣笠城合戦。夜半、一族は義明を残して城を退去。衣笠城落城。三浦義明討死(89歳)
- 8/29 義澄、安房にて頼朝と合流
- 10/6 頼朝、安房から行軍し鎌倉入り。宿館を定める。
- 10/21 義澄、頼朝に「上洛より、まずは東国の平定を」と献言。
- 11/17 和田義盛、侍所別当に任ぜられる
- 寿永元年(1182) 佐原義連、北条政子の安産祈願のため三浦十二天(芦名十二所神社)に赴く
- 元暦元年(1184) 義盛・義連、一谷合戦に加わる(鴨越え)
- 文治元年(1185) 壇ノ浦の合戦で平家滅亡
- 文治5年(1189) 義盛、奥州征伐の前に運慶に仏像の造立を依頼
- 建久3年(1192) 頼朝、征夷大將軍に就任。義澄が除書(任命書)を受け取る大役を務める。
- 建久5年(1194) 頼朝、義明追善供養のため寺院建立を発願
- 正治元年(1199) 頼朝死去(53歳)
- 正治2年(1200) 義澄死去(74歳)
- 建保元年(1213) 和田合戦。北条義時に討たれ和田一族滅亡
- 承久3年(1221) 承久の乱。鎌倉幕府軍が勝利し、後鳥羽上皇は隠岐に配流
- 延応元年(1239) 義村死去(推定70歳)
- 宝治元年(1247) 宝治合戦。北条時頼の外戚安達氏により三浦一族宗家滅亡。庶流の佐原盛時が三浦介を継承
- 永正13年(1516) 新井城主の三浦義同、北条早雲に攻められ自害

三浦半島の三浦一族は滅亡しますが、義同の二子時綱が安房正木郷に逃れ正木氏を名乗り、その曾孫にあたるのがお万です。お方は徳川家康の側室となり、紀伊藩と水戸藩の祖を生み、徳川將軍は8代吉宗以降、幕末に至るまでお万の流れを汲む者が就任したことになりました。

また、かつて三浦氏所領であった全国各地に一族の流れが続いています。

三浦一族関連略系図



鎌倉幕府と源頼朝没後の13人の合議制

源頼朝が鎌倉に幕府を開き、日本で初めてとなる武家政権を樹立しました。

鎌倉は、「三方を山に囲まれ、一方が海に開く」いわば天然の要害となる土地です。頼朝をリーダーとする武家は、鶴岡八幡宮を中心とした都市づくりに励み、切通と呼ばれる山を切り開いた通路や、物流拠点となる人工島等を整備しました。

頼朝の死後は、若くして2代將軍となった頼家を支えるため、頼朝に仕えた重臣から「13人の合議制」の構成員が選ばれました。選ばれたのは、三浦義澄、和田義盛、北条時政、北条義時、大江広元、中原親能、安達盛長、梶原景時、比企能員、三善康信、二階堂行政、足立遠元、八田知家です。しかし、実際に一堂に集まって協議した形跡がないためか、合議制の存在を疑問視する説もあります。

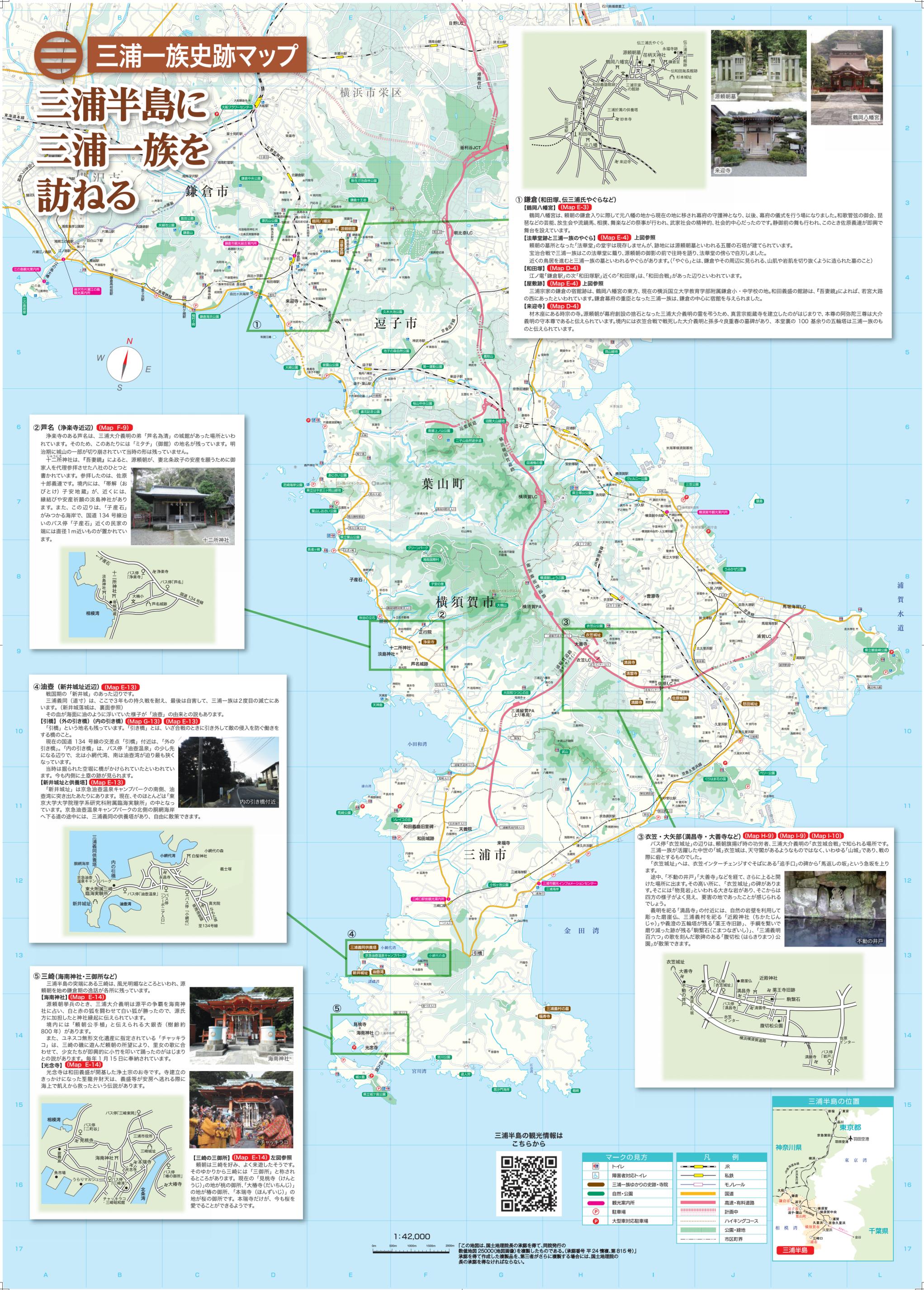
その後、鎌倉幕府内で激しい権力争いが繰り広げられ、三浦氏は、北条氏に次ぐ実力者となります。しかし、北条氏にとって執権体制確立の最後の障害となった三浦氏宗家は、宝治合戦で敗れ滅亡しました。



油壺湾 (三浦市)

三浦一族史跡マップ

三浦半島に 三浦一族を 訪ねる



① 鎌倉(和田塚、伝三浦氏やぐらなど)
【鶴岡八幡宮】(Map E-3)
 鶴岡八幡宮は、頼朝の鎌倉入りに際して元八幡の地から現在の地に移され幕府の守護神となり、以後、幕府の儀式を行う場になりました。和歌や謡曲の御会、琵琶などの芸能、放生会や流鏝馬、相撲、舞臺などの祭事が行われ、武家社会の精神的、社会的中心だったのです。静御前の舞も行われ、このとき佐原義遠が御輿で舞臺を設けています。
【法華堂跡と三浦一族のやぐら】(Map E-4) 上図参照
 頼朝の墓所となった「法華堂」の堂宇は現存しませんが、跡地には源頼朝墓といわれる五層の石塔が建てられています。宝治合戦で三浦一族はこの法華堂に籠り、源頼朝の御影の前で待時を語り、法華堂の傍らで自刃しました。近くの鳥居を進むと三浦一族の墓といわれるやぐらがあります。「やぐら」とは、鎌倉やその周辺に見られる、山肌や岩肌を切り抜くように造られた墓のこと
【和田塚】(Map D-4) 上図参照
 江戸幕「鎌倉」の次「和田塚」近くの「和田塚」は、「和田合戦」があった辺りといわれています。
【歴史館】(Map E-4) 上図参照
 三浦宗家の鎌倉の歴史館跡は、鶴岡八幡宮の東方、現在の横浜国立大学教育学部附属鎌倉小・中学校の地、和田義盛の館跡は、「吾妻鏡」によれば、若宮大路の西にあったといわれています。鎌倉幕府の重臣となった三浦一族は、鎌倉の中心に宿館を与えられました。
【来迎寺】(Map D-4)
 材木座にある時宗の寺。源頼朝が幕府創設の捨石となった三浦大介義明の墓を拜うため、真言宗能登寺を建立したのがはじまりで、本尊の阿彌陀三尊は大介義明の守本尊であると伝えられています。境内には衣笠合戦で戦死した大介義明と孫多々良重春の墓があり、本堂裏の100基余りの五輪塔は三浦一族のものといわれています。

② 芦名(浄楽寺近辺) (Map F-9)
 浄楽寺のある芦名は、三浦大介義明の弟「芦名為清」の城館があった場所といわれています。そのため、このあたりには「ミタチ」(御館)の地名が残っています。明治期に城山の一部分が切り取られていた当時の形は残っていません。
 十二所神社は、「吾妻鏡」によると、源頼朝が、妻北条政子の安産を願うために御家人を代理参拝させた八社のひとつと書かれています。参拝したのは、佐原十郎義連です。境内には、「帯解(おびとけ)子安地蔵」が、近くには、縁結びや安産祈願の淡島神社があります。また、この辺りは、「子産石」がみつかる海岸で、国道134号線沿いのバス停「子産石」近くの民家の端には直径1m近いものが置かれています。



④ 油壺(新井城址近辺) (Map E-13)
 戦国期の「新井城」のあった辺りです。三浦義明(道守)は、ここで3年もの持久戦を耐え、最後は自害して、三浦一族は二度目の滅亡にあいます。(新井城跡は、裏面参照)
 その血が海面に油のように浮いていた様子が「油壺」の由来との説もあります。
【引橋】(外の引き橋) (内の引き橋) (Map G-13) (Map E-13)
 「引橋」という地名も残っています。「引き橋」とは、いざ合戦のときに引き外して敵の侵入を防ぐ働きをする橋のこと。
 現在の国道134号線の交差点「引橋」付近は、「外の引き橋」。「内の引き橋」は、バス停「油壺温泉」の少し先になる辺りで、北は小網代湾、南は油壺湾が迫り最も狭くなっています。
 当時は掘られた空堀に橋がかかれていたといわれています。今も内側に土塁の跡が見られます。
【新井城址と供養塔】(Map E-13)
 「新井城址」は京急油壺温泉キャンパールの南側、油壺湾に突き出たあたりにあります。現在、そのほとんどは「東京大学大学院理学系研究科附属臨海実験所」の中となっています。京急油壺温泉キャンパールの北側の網新海岸へ下る道の途中には、三浦義明の供養塔があり、自由に散策できます。



⑤ 三崎(海南神社・三御所など)
 三浦半島の突端にある三崎は、風光明媚なところといわれ、源頼朝を始め鎌倉期の逸話が各所に残っています。
【海南神社】(Map E-14)
 源頼朝挙兵のとき、三浦大介義明は源平の争奪を海南神社に古い、白と赤の狐を闘わせて白狐が勝ったので、源氏方に加担したと神社縁起に伝えられています。
 境内には「頼朝公手植」と伝えられる大銀杏(樹齢約800年)があります。
 また、ユネスコ無形文化遺産に指定されている「チャッキラコ」は、三崎の磯に遊んだ頼朝の所望により、里女の歌に合わせて、少女たちが即興的に小竹を叩いて踊ったのがはじまりとの説があります。毎年1月15日に奉納されています。
【光念寺】(Map E-14)
 光念寺は和田義盛が開基した浄土宗のお寺です。寺建立のきっかけになった室籠弁財天は、義盛等が安房へ逃れる際に海上で飢えから救ったという伝説があります。



【三崎の三御所】(Map E-14) 左図参照
 頼朝は三崎を好み、よく来遊したそうです。そのゆかりから三崎には「三御所」と称されるところがあります。現在の「見眺寺(けんとうじ)」の地が桃の御所、「大椿寺(だいちんじ)」の地が梅の御所、「本瑞寺(ほんずいじ)」の地が桜の御所です。本瑞寺だけが、今も桜を愛でることができるようです。

③ 衣笠・大矢部(満昌寺・大善寺など) (Map H-9) (Map I-9) (Map I-10)
 バス停「衣笠城址」の辺りは、頼朝旗揚げ時の功労者、三浦大介義明の「衣笠城合戦」で知られる場所です。三浦一族が活躍した中世の「城」衣笠城は、天守閣があるようなものではなく、いわゆる「山城」であり、戦の際に岩とするものでした。
 「衣笠城址」へは、衣笠インターチェンジすぐそばにある「追手口」の碑から「馬返し」の坂といき急坂を上ります。
 途中、「不動の井戸」「大善寺」などを経て、さらに上ると開けた場所に出ます。その高い所に、「衣笠城址」の碑があります。そこには「物見塔」といわれる大きな岩があり、そこからは四方の様子がよく見え、要害の地であったことが感じられるでしょう。
 義明を祀る「満昌寺」の付近には、自然の岩壁を利用して彫った磨崖仏、三浦義村を祀る「近殿神社(ちかたじんじ)」や義遠の五輪塔が残る「薬王寺旧跡」、手綱を繋いで磨り減った跡が残る「駒繫石(こまつないし)」、「三浦義明百六つ」の歌を刻んだ歌碑のある「腹切松公園(はらきりまつ公園)」が散策できます。



三浦半島の観光情報は
こちらから



マークの見方	凡 例
トイレ	JR
障害者対応トイレ	私鉄
三浦一族ゆかりの史跡・寺院	モノレール
自然・公園	国道
観光案内所	高速・有料道路
駐車場	計画中
大型車対応駐車場	ハイキングコース
	公園・緑地
	市区町界



1:42,000

【この地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の数値地図25000(地形図)を複製したものである。(承認番号 24情推、第815号) 承認を得て作成した複製品を、第三者にさらに複製する場合は、国土地理院の長の承認を得なければならない。】